

スポ根とは何なのか——『巨人の星』論——

飯沢 夏菜子

はじめに

今回取り扱うテキストの『巨人の星』が連載されていた一九六〇年代から七〇年代の日本を表す言葉は「巨人・大鵬・卵焼き」である。長嶋茂雄・王貞治を加えた強豪チームであった巨人と、一九六〇年に優勝し後に横綱にまでのぼりつめた相撲の大鵬、そして当時高価であった卵を使った卵焼きが、子どもたちに人気だった。

六〇年代から七〇年代の日本は高度経済成長期にあたる。その中で「スポーツ根性もの」と、原作・梶原一騎、作画・川崎のぼるによる『巨人の星』が生み出され、今もなおさまざまな作品に影響を与えている。私はそんな「スポーツ根性もの」というジャンルについて、『巨人の星』を中心に論じていこうと思う。

本論では、原作であるマンガの『巨人の星』をテキストとして扱う。

なお、テキストの引用は、文庫版『巨人の星』（一九九五年六月〜一九九五年八月一〇日、全一一巻、講談社）を使用する。論中では『巨人の星』（●巻●頁）と表記する。

第一章 先行論文のまとめ

*スポーツ根性ものというジャンルについて

一般的に「スポーツ根性もの」（以下「スポ根もの」）は、一九六〇年代から七〇年代にかけての高度経済成長期に「努力型の主人公が血のじむ特訓を重ね、超人的な必殺技をあみだして天才型のライバルに勝利する」といった図式化されたストーリー⁽¹⁾で、TVドラマやマンガ、アニメーションで人気を博したジャンルのことを指す。

「スポ根もの」は、一九六四年行われた東京オリンピックにおける「東洋の魔女」と呼ばれる女子バレー選手の活躍によって生まれた。「東洋の魔女」を育て上げた大松博文監督の、スパルタ指導で選手を勝利に導いていく姿が当時の人々に尊ばれ、スポーツ界にとどまらず一般社会にも「根性」が植えつけられていった。

斎藤孝は、高度経済成長期に人気を博した理由について、戦後から高度経済成長期の日本においては、「根性」とか「燃える」といったことは恥ずかしいことでも何でもなく、当たり前前に共有されていた価値観であったからだという⁽²⁾。現在、世界に出ていく日本の一流スポーツ選手の中にはクールに振舞う者もいるが、当時はそれとは対照的に、スポーツには熱気が基本であったのである。

また、井上俊と菊幸一は、六〇年代から七〇年代にかけての貧富の差といった時代反映だけでなく、戦後日本の欧米諸国に対する「追いつけ追い越せ」という精神も、「スポ根もの」の根性・忍耐の精神と一致し「スポ根もの」が人気を博したのだと言う⁽³⁾。

このように戦後という時代の流れと、東京オリンピックによる日本のスポーツ選手の活躍によって「スポ根もの」が生まれ愛されたのである。

西村安弘は、武道小説から「スポ根もの」が誕生したという⁽⁴⁾。吉川英治の「宮本武蔵」（一九三三年 全六巻 大日本雄弁会講談社）の武蔵と小次郎の関係が、「スポ根もの」における努力型の主人公と天才型のライバルとの対立構造に強い影響を与え、何より『巨人の星』の漫画原作者・梶原一騎がスポーツ漫画に武道イデオロギーを導入することで、「スポ根もの」というジャンルを開拓したのである。「ライバル」という主人公の努力と根性を強調させる存在だけでなく、「師匠」、「恋人」という共通した構図も武道小説から利用された。また、必殺技や魔球も武道小説から取り入れられ「スポ根もの」には欠かせないものとなった。

井上と菊は、六〇年代から八〇年代における「スポ根もの」の変化もまとめている⁽⁵⁾。六〇年代は前述の通り、時代背景とスポーツ選手による活躍で人々に人気を博していた。しかし、一九七三年のオイルショックを契機に突入した日本の安定期によって社会が大衆化し、人々の関心が世界観やイデオロギーという「大きな物語」から「人並みの生活」を指向する「小さな物語」に焦点を合わせはじめた。安定期に入ること貧富の差が希薄化していっただけでなく、根性・忍耐といった要素も六〇年代に比べ関心が薄くなった。

そして、最も根性・忍耐の要素が希薄化したのが、八〇年代の少年漫画への恋愛要素の導入である。少年スポーツマンガの世界では恋愛がスポーツを優先して描かれることがなかつ

たのだが、あだち充の「タッチ」（一九八一年 全二六巻 小学館）によって、スポーツの成功と恋愛の成功を同義されるようになってしまったと指摘されている。それまで少年誌はおろかスポーツマンガにおける恋愛要素はタブーであったのだが、八〇年代になり、恋愛もスポーツも「日常」として消化されてしまったのである。

少女マンガにおける「スポ根もの」からも、時代による変化は読み取れる。

堀籠美佳は、ジェンダーの視点からスポーツ少女マンガについて論じている（6）。少女マンガにおける「スポ根もの」が今まで述べてきた「スポ根もの」と違う部分は、そこに「女性らしさ」が発生してしまうことである。山本鈴美香の「エースをねらえ！」（一九七三年 全一八巻 集英社）や浦野千賀子の「アタックNo.1」（一九六八年 全二二巻 集英社）といった七〇年代スポ根少女マンガには、特に女性の社会的行動がスポーツにも反映されている。

スポーツは基本的に男性の性を表しやすく、「女らしい身体」のイメージとかけ離れたものであると考えられていた。そのため、スポ根少女マンガには恋愛要素がスポーツと同等に取り上げられる。少女たちがスポーツを通して女性の性を超えようとしていく、いわゆる「女の世界」を中心として「女性らしさ」を超えようとするのが七〇年代のスポ根少女マンガであった。

しかし、ゼロ年代のスポーツ少女マンガには、時代の変化による男と女の書き方の変化によって女性を排除した男性だけの「ホモソーシャル」な世界、つまり『巨人の星』のような「女性らしさ」のない世界に少女が飛び込んでいく作品が出されるようになる。

ところが、「ホモソーシャル」な世界に入った少女は、その世界に入っていない他の女性からの「妬み」「僻み」を受けただけでなく、「ホモソーシャル」な世界にいる男性からも拒絶される。その理由として、「ホモソーシャル」な世界に入ったとしても、その少女に「女性らしさ」が付随し、ぬぐうことができないからである。実際のスポーツでも、「男らしい」スポーツをする女性は、「男のままざし」を持つメディアによって「女らしさ」を求められ、その視線が私たちにも埋め込まれている。

私は「スポ根もの」に登場する「根性」という精神や「夕日」といった背景などからもう少し「スポ根もの」の時代変化を考えたい。

現在、「スポ根もの」は「主人公がスポーツの勝負を通じて技術的・精神的に成長する姿を描いたビルドアップスロマン」（7）や「スポーツに熱中して取り組む青春物語」（8）など多様になっただけでなく、スポーツ作品ではない文化系部活動を取り扱った作品も「スポ根もの」と呼ばれるようになった。競技カルタを題材とした末次由紀の「ちはやふる」（二〇〇八年、既刊二六巻 講談社）がその例の一つである（9）。また、バレー漫画である古館春一の「ハイキュー!!」（二〇一二年 既刊一三巻 集英社）も「厳しい試練にぶち当たりにながらも努力し乗り越えていく」（10）という「スポ根もの」として人気を博している。このように「スポ根もの」の定義が次第にあいまいとなり、「熱血」や「努力」が存在していれば「スポ根もの」であると言われるのが現状である。

ひぐちアサの「おおきく振りかぶって」（二〇〇三年 既刊二四巻 講談社）は、高校野球を主軸にした「野球もの」で、主人公である投手の気の弱さが招いた過去のチームメイトとの確執と、現バッテリーとの関係の悪さが、高校で出会ったチームメイトや監督との出会いによって少しずつ変化していく成長過程が事細かに描かれている。岩間夏樹は、「スポ根もの」のスポーツマンガではない作品としてこの「おおきく振りかぶって」を挙げている（11）。野球の試合経過をまったく省略しないで描き、精密な人物設定、複雑な人間関係と気持ちのすれ違い、そこで繰り広げられる対立と和解をくり返しながら主人公の成長を描いていく「関係性」の物語が『巨人の星』のような「努力」と「勝利」をテーマにした「スポ根もの」にはないという。

紙屋高雪も、河原和音の「青空エール」（二〇〇八年 既刊一六巻 集英社）を取り上げ、現代の少年・少女マンガにおいてどのように「スポ根もの」が描かれているかを述べており、「青空エール」でも「おおきく振りかぶって」と同様に「関係性」を描いているという（12）。この「青空エール」という作品は、楽器の経験がない主人公が全国レベルの吹奏楽部に入り、次々と待ち構える厳しい試練を乗り越えていくのが物語の軸である。紙屋はこのゼロ年代における「スポ根もの」について、まず六〇年代の「スポ根もの」とは違う部分を次のように述べている（13）。

『巨人の星』や『ジョー』のように、おそろしげなライバルが出てきたり、魔球や必殺

パンチを繰り出すわけではない。『青空エール』では、現代の子どもたちが出遭う、心が折れそうになるほどの鋭い困難、とりわけ人と人の関係でのトラブルが主人公を襲うのである。

加えて、そこには、挫折を誘う現代的な様々な「いやし」の言葉が、数多く待ち伏せしている。

ゼロ年代のあいまい化した「スポ根もの」には魔球などが一切出てこない。『青空エール』における人と人の関係性は、「おおきく振りかぶって」でも同じように問題視されており、『巨人の星』にはないものとして指摘されている。

しかし、紙屋は次にこう述べている（14）。

襲いかかる試練に歯をくいしばって乗り越えようとする姿はまさに「スポ根」。

（中略）

強い個人となって、いかなる困難にも打ち勝ちたい——この思想は、裏返しになって、「困難に打ち勝たない者はその強さを持ちえなかった落伍者であり、弱かったその人の責任である」という「自己責任」論の原型にも思える。

「スポ根もの」にある試練に乗り越えていく姿は「おおきく振りかぶって」といったゼロ年代スポーツマンガにも存在する。私は、『巨人の星』内の飛雄馬のまわりの人物から人と人との関係性が飛雄馬にどう影響を与えているか考え、ゼロ年代とどのように違うのかを考察したい。

* 巨人の星

『巨人の星』には、長嶋茂雄や王貞治といった実際の人物が登場する。フィクション作品に実在の人物を盛り込むことは『巨人の星』以前からあったものであり、スポーツ世界を舞台にした作品に盛り込んだのは梶原一騎であった。

佐原龍誌は、その時代に生きる実在の人物と、当時実際に起こった出来事の中に、主人公の星飛雄馬の子供時代からの成長が、様々な人間関係と出来事によって展開されることで当

時の若者達の境遇とオーバーラップして受け入れられたのではないかという（15）。

また、同論で佐原は、外来文化であった「ベースボール」と、『巨人の星』における「野球」は大きく異なると言う。もともとスポーツは「遊戯」「楽しむ」と言ったものであるが、『巨人の星』における野球は、娯楽とは無縁な「血と涙と汗、根性」を前面に「努力、忍耐」といった「人生訓」を展開し構成されている。日本に古くから育まれてきた「武道」や「武士道」の精神性を彷彿とさせ、また、『巨人の星』における野球だけでなく日本の野球も、日本文化としての武道や武士道を内包しながら定着、発展してきたと捉えても良いという指摘を佐原はしている。実際、プロ野球日本代表が「侍ジャパン」と呼ばれていることから武士道を取りいれていることがわかる。

鷺津浩子は、『巨人の星』における野球は「仕事」として存在すると指摘し、大リーグとの違いを次のように述べている（16）。

もちろん、『巨人の星』には、労働組合は登場しない。契約以前の「人間的」つながりが重視されている世界では、労働条件の向上を図ることが必要なのだ。球団では、親が子を思うように、選手のためを思い、選手は選手で、子が親を慕うように、球団に感謝している。

ところが、大リーグでは、労働条件の向上は選手の権利として認められている。球団と選手は「人間的」つながりで結ばれているのではなく、契約によって結ばれているのだから、契約条件を含めた労働条件の向上のためには、ストライキも辞さない。問題は合理的に解決しなければならぬのだ。

また、岩間も次のように述べる（17）。

とにかく一生懸命努力すれば、望ましい結果がついてくる、というのがスポ根マンガの基本的な構造だった。

(中略)

主人公以外にも抱えるトラウマと葛藤し、チームメイトともすれ違いその感情的なわだかまりが物語の軸になっている。献身的な努力はあくまで所属するチームに行き、貧しさからの飛躍も高度経済成長期のガンバリズムの基本的な動機づけた。

この努力があくまでも「仕事」として所属するチームに行ってしまうのは、当時の野球の状況が関係しているのではないかと思う。私は『巨人の星』が出された六〇年代の野球について調べ、その「仕事」としての野球を考察していきたい。

前述で「スポ根もの」に武道のイデオロギーが導入されていると述べたが、山田夏樹は「野球マンガ」における魔球について以下のように述べている(18)。

初めて「魔球」を登場させた貝塚ひろし「くりくり投手」(「おもしろブック」58・4(63・9))以降、野球マンガは投手と打者の対決構造に焦点を当てるものとなり、その際、主人公らが「魔球」を(禁欲的)な(修行)を通して開発し、駆使していく姿に「武士道」が見出されていった。その構図は、本作に強い影響を与えた福本和也原作/ちばてつや作画「ちかいの魔球」(「週刊少年マガジン」61・1/1〜62・12/9)の結末に見られるように、最終的には「魔球」による大リーグ打倒を描くこととなり、言い換えれば「武士道」(日本)によるアメリカ打倒という非常に図式的な構図が示されていくこととなった。

『巨人の星』で父・一徹が飛雄馬に「大リーグ強制ギブス」で特訓させ、その後誕生した魔球の名前が「大リーグボール」であることから、アメリカを意識していることが分かる。

『巨人の星』には、「大人」と「子供」、「貧困」と「金持ち」といった多くの対立構造が存在する。鷺津は、その対立構造に星飛雄馬の家族構成について挙げている(19)。星家には

母親が亡くなっており最初から存在していない。姉の明子が母親役を務めることで父、母子という三角関係は保障されるのだが、姉は父親(大人の男)の対立項である母親(大人の女)にはなりえず、飛雄馬は、大人の女の拒絶を示すだけでなく、母親像の美化を招き、飛雄馬の恋愛にも影を落とすことになる。恋愛の対象であった日高美奈が若くして亡くなってしまいうも、母親のような理想な女性であったためだと指摘する。

私は、もう少し飛雄馬と他の人物との二項関係を取り上げてみたい。

大塚英志とササキバラゴウは、『巨人の星』の核心は、子が親を乗り越え自分の道を模索する少年の成長物語Ⅱビルドダウングスロマンであると同時に、星飛雄馬は父親離れができない葛藤を持ち「大人になれない子ども」であると指摘している(20)。飛雄馬は、自分自身でも指摘しているように父親が産み出した「野球ロボット」であり、「成長しない少年」である。そして、それは父・一徹が与えた「大リーグ強制ギブス」によって、もともと野球に向いていない体格であった飛雄馬の身体を強制し、のちに左腕を故障することになるという「成長」を禁じさせる機能を持つ。その「父」の姿が、「鉄腕アトム」の天馬博士と重なるという。天馬博士は成長しないロボットのアトムに成長を求め、アトムを死んだ息子の代わりにする。一徹は、巨人を追われその夢を息子に代わりにさせ、飛雄馬を「野球ロボット」にした。最終話における飛雄馬の左腕の破壊は、「鉄腕アトム」における最終話と重なり、『巨人の星』は「アトムの命題」を継承したのだという。飛雄馬が戦っていたのは父親の与えた試練なのでなく、小さな身体を酷使し野球の中で生きていかななくてはいけないという運命、つまり永遠に父親離れができないという呪縛なのである。

私は、この父と子の関係が飛雄馬にとってどのような影響を与えていったのか考察していきたい。

第二章 人物関係

* 飛雄馬の野球人生

紙屋高雪は、「スポ根もの」の特徴として主人公が「孤独」になることを挙げている(21)。

飛雄馬は初め、父の一徹や姉の明子、高校で出会ったバッテリーの伴に支えられ、「巨人の

星」を目指していた。しかし物語後半、飛雄馬を支えていた人たちは、飛雄馬の元から離れていってしまう。この人物たちが、飛雄馬の気持ちも、そして自分自身の気持ちまでも犠牲にして得ようとしたのは、飛雄馬の「青春」つまりは「野球人生」であった。

一徹は、中日のコーチとなり、伴もまた一徹に巨人から引き抜かれることで飛雄馬の敵となる。どちらも飛雄馬の父、そして親友という立場を捨てていけないにもかかわらず、飛雄馬の敵として立ちはだかる。

一徹が子どもたちと対立し、飛雄馬と明子が住んでいた家を離れたとき、その子どもたちの「独立」に涙を流すシーンがある。父として子が離れていくことに寂しさを持ちつつ、一徹は「一つの時代が終わり、新しい時代をはじめると遺影の妻に向かって述べている。

あらしの時代だ！

あらしに向かってどこまで子どもが飛ぶか親が飛ばせるか

血だるまとなる時代だ！

『巨人の星』（七巻一八四頁）

この時点で、一徹は川上からの巨人二軍コーチの誘いを断り、父としてではなく敵として飛雄馬を「巨人の星」という夢に向かわせようとする。そして、野球の鬼という仮面を被るのである。

一徹は鬼の仮面を被り飛雄馬の魔球を破ろうとするが、その仮面がはがれてしまうことが多い。

飛雄馬が恋人・美奈の死を乗り越えて復活したと記者陣から聞いたとき、既に敵側だった一徹は、目薬をさしすぎたと言いながら涙を流す。しかし、側のトレーナーが言う「あふれるほどさしたわりにはちつともへつてない」という台詞で、復活した子に対する涙ののだと読者は気づく。

伴「み…見たぞい！お おやじさん…うんにや星中日コーチはいまいっしゅん目をふ

せたっ 肉親の情がやはりむきだしじゃったわい！」

飛雄馬「そ…そんな人じゃない！あの野球の鬼は！」

『巨人の星』（八巻二〇二頁）

また、復帰後の中日戦で、その仮面に気づいていたのは伴だけで、飛雄馬は気がつかなかった。

わ：わしはむりをかさねとつたのかもしれない

飛雄馬に対して…：…やつのがたを見とつたらふいに泣けた！

父にいじめぬかれ元親友と対決し

チームのためかびのはえた大リーグボール一号まで投げる姿に泣けた！

『巨人の星』（一〇巻一九三頁）

大リーグボール二号を公で打ち破る可能性のあった一徹・伴率いる中日戦のとき、泣いていた伴にはサインに見えてしまったという場面である。このように一徹が見せる父の姿は伴にしか気が付かれない。

その伴もまた、一徹に巨人から引き抜かれ中日の選手としてトレードされた際、初めは中日に入るくらいなら野球をやめて飛雄馬を傍で支えるといい、トレードを拒否していた。しかし、そんな飛雄馬自身に「中日へ行け」と言われてしまい、飛雄馬の姉であり想い人でもあった明子にも「お互いのためにならない」という決定打を打たれ、中日に行くことを決意する。鬼の仮面を被った一徹にそのかさされ、大リーグボール二号を自分の手で打つと決めた伴もまた親友ではない「敵」という仮面を被る。

大リーグボール二号を花形に破られたあと、飛雄馬を再起させるために部屋まで押しかけた伴は、その帰り道に「敵」としてではなく「親友」として涙を流す。

敵味方に別れ もう友情は卒業とやらでまっすぐ口にできんとは…

ああ おとなになるとはむずかしいことよ…うふふふ

『巨人の星』（一〇巻三三〇頁）

このように自分の気持ちを飛雄馬には決して見せずに飛雄馬の野球人生を優先するのは

彼らだけではない。

姉の明子は、野球をする飛雄馬としてではなく家族として、弟として彼を支えていた。飛雄馬は、セントルイス・カーディナルス戦で戦ったオズマという外国選手に「野球ロボット」と言われる。これはオズマ自信も自分がそうであると言いつつ、明子もまたテレビでオズマを見た際に飛雄馬と同じように「野球しかできない子」だと言いつつ、父に殴られてしまう。

父と言いつつ争いになったことで飛雄馬と共に出てきた明子は、共同でマンション暮らしを始め、自分ひとりで飛雄馬を支えて行こうとする。しかし、花形と出会い相思相愛の関係になってしまったことで、飛雄馬との関係が上手くいかなくなってしまふ。飛雄馬の野球人生に悪影響を与えると考えた明子は行方をくらます。ここで明子は飛雄馬と花形という選択肢で「飛雄馬」を選んだ。これは、自分の気持ちよりも弟の野球人生を優先した結果であり、「自己犠牲」とも言える。(しかし、花形もまた明子と飛雄馬なら「飛雄馬」を選択するが、これは「自己」の欲望のために生きている「自己中心的」であると言えぬ。)

また、恋人で、「野球ロボット」であることに苦悩していた飛雄馬にとって精神的支柱であった美奈も、自分の気持ちと飛雄馬の野球人生という選択肢で、飛雄馬の野球人生を選択してしまふ。そのため、飛雄馬に息を引き取る瞬間を見とられずに亡くなってしまふ。これもまた「自己犠牲」である。

以上のように、飛雄馬を愛する周囲の人々は、自分の感情ではなく飛雄馬の野球人生を優先してしまふことで、飛雄馬の元から離れてしまふことが分かる。最終的に、飛雄馬は環境的にも精神的にも「孤独」となる。

また、飛雄馬は自分自身で「孤独」を招いたとも言える。飛雄馬は自分の野球人生を優先しようとした人たちの行動に疑問を抱くが、その疑問を追求せず、一徹や伴が仮面を被っていることに一切気が付かなかったたのである。

このように、それぞれの選択は、結局飛雄馬の意志とは関係なく、飛雄馬を「孤独」にしてしまふ悲劇を招いた。

* 応援者

最後まで登場するマンガ家志望の牧場春彦という人物はライブルでも家族でも親友でもない。彼は『巨人の星』の中で応援者としての機能を持つ。しかし、飛雄馬にとって牧場は

あまり良い存在ではなかった。

牧場は身体が弱く、伴から「うんち」と言われるほど運動音痴で、高校時代からマンガ家を目指していた。高校の野球部内で一徹代理コーチとして飛雄馬に「本当の仲間とは」という教訓を教えようと仕組んだ紅白試合で、牧場はアンパイア(審判)をする。試合終盤、「ハそ作戦」で打たれ焦る飛雄馬に向かい牧場はこう発言する。

星くん！ぼくはかなしい

(中略)

多くの野球まんが主人公のイメージも星飛雄馬くんきみだったのに！

『巨人の星』(二巻一七五頁)

この発言から飛雄馬の怒りの矛先が父に向かい、父子関係崩壊の危機にまで陥る。結局これも一徹の計算の内であり、飛雄馬は「仲間」の信頼を得る。

甲子園の左門対飛雄馬戦の前にも、牧場は飛雄馬に左門の貧しくも小さい兄妹を支えているという家庭環境を口にしてしまったことから、他人の悲しみに感じてしまふほど繊細な心を持つ飛雄馬はひどく動揺してしまふ。その結果、左門に勝利し決勝へ進んだものの、飛雄馬は腕を痛めたまま花形との「血染めの決勝戦」を臨むことになる。



↑ 図① 一一卷二九一頁

さらに、伴の父親である理事長を殴つた罪を、彼の家庭環境を案じて身代わりに飛雄馬が高校中退をするはめになってしまったことや、巨人入団後も球質が軽いという「致命定期な欠点」を左門に予感させてしまったこと、

ライバルたちを集めることで大リーグボール二号が破られる場面を作ってしまうなど、飛雄馬にとって牧場は悲劇ばかりを招き入れる。

そして、極め付けとして大リーグボール三号が飛雄馬の選手生命を絶ってしまうことを読者に分からせてしまう場面がある。飛雄馬の「孤独」の表れが、マンガ家となり「球魂一路」という、彼の描くマンガとの対比で読み取ることが出来る(図①)。飛雄馬は、伴が中日へ行き試合で大リーグボール二号が打ち破られてから、目の輝きを失っている。飛雄馬がそれまで持っていた輝きがマンガに反映されていることから、飛雄馬の「孤独」を強調する二重構造をもつ。また、牧場がマンガ家として活躍していくのと比例して、飛雄馬は崩壊していくという相反関係も、飛雄馬をよりマイナスにさせる機能を持つといえる。

だが、牧場は野球をしない、マウンド上には上がらない外部の人間(応援者)である。そしてそれは明子や美奈といった女性も同様である。

同じ「野球もの」である「おおく振りかぶって」などでは、応援者は選手を元気にすると同時にやる気を奪う機能を兼ね備えた存在であるのに対して、『巨人の星』における応援者は飛雄馬を悲劇に招き入れる機能しか持たないところに特徴がある。

* 受け継ぐ物語

『巨人の星』は、父・一徹が成しえなかった「巨人の星」を息子の飛雄馬に託すという「受け継ぎ」の物語である。そして物語のラスト、飛雄馬の「野球」と「愛」は、左門に受け継がれる。

主要人物の中で唯一、その選択において飛雄馬を優先することができなかった人物に、左門豊作がいる。同じライバルである花形が、他の試合を犠牲にしてまで飛雄馬との一騎打ちに専念できるのは「金持ち」だからである。「貧乏」で妹や弟たちを食べさせなければならぬ左門が唯一飛雄馬を選択したのは、「巨人」ではなく「大洋ホエールズ」に入団した時のみである。

飛雄馬に向けて花形がその理由を言う場面がある。

すばらしい生涯のライバルと甲子園の決着をつけたいがゆえに

かれ 左門豊作は あのだん底の生活と戦う男はあえて…

条件のいい巨人との契約をけり大洋に入団したつ

『巨人の星』(八巻四一頁)

これは、たとえ資金が少なくても、仲間としてではなくライバルとして飛雄馬と戦いたいという家族よりも自分のプライドを優先した結果である。

しかし、その後も左門は「大リーグボール」を公に打つ機会を逃し、仲間からも「運のない男」だと言われてしまう。

最終話において飛雄馬は「大リーグボール三号」は「破壊」を意味すること、また左門の想い人である京子に告白をしろと伝える。

主君をいさめたい しかし、封建時代の主従の道として言えん

そこで 切腹する

切腹という絶対の滅亡とひきかえに主君に一世一代の言い分をきかせる

『巨人の星』(一一巻三四六頁)

これは左門が、飛雄馬が野球界にいらなくても「野球」と「愛」を選択できるからこそ託した言い分つまり希望であると言える。

エピソードにて飛雄馬が謎の失踪をし、球界もファンも一時は騒然となったが、すぐに忘れ去られてしまったことは、かつて摩送球で巨人を追い出され忘れ去られた一徹を思い出させる。

巨人の星をおれの新しい人生において

こんどはどんなゆめの星にするのかな?

『巨人の星』(一一巻三七九頁)

「新しい人生」といつていることから、飛雄馬自身が「巨人の星」になり得ないことを意味し、「巨人」という野球そのものを左門に託したことを意味するのではないだろうか。飛

雄馬の夢は左門に「受け継」がれたのである。

三章 時代の変化

* 巨人批判

当時の日本を表す言葉に「巨人・大鵬・卵焼き」があるように、巨人の人氣が絶大であった。六一年に「打撃の神様」であった川上哲治が巨人の監督に就任し、「ドジャース戦法」を掲げチームの勝利を最優先とする「管理野球」を日本のプロ野球で初めて導入した。監督一四年間に日本が一回という偉業を成し遂げたまさにその時代が巨人の最盛期であり後のプロ野球界にも多大な影響を与えた。六三年には、つりあがる契約金に音をあげ初めて選手を各チームにふりわけするためのドラフト制度を導入する。世界初のドラフトは三年のアメリカン・フットボールであり、大リーグも日本と同様に六五年、「傘下チームの戦力均衡」と「新人選手の契約金高騰の防止」を目的にドラフト制度を導入した。しかしこれは選手にとってはあまり好ましくないものであり、選手と団体の中のトラブルが生じるようになる。また、いずれの球団とも選手契約を締結できるフリーエージェント資格の取得期限の短縮など、選手側の希望を加味した改革はされなかったことも、チームと選手の間を大きく変えるものとなった。

『巨人の星』内で、実際のプロ野球で起こった八百長事件を取り扱う場面がある。そのことに花形は怒り狂う。

日本においてプロ野球選手のおかれている地位は 単なる野球を職業とする人間ではないっ

純真な少年ファンにとっては…

青春の偶像なのだ！英雄なのだ！

この もったいないほどありがたい光栄をわれわれは 命にかえても死守せねばならん！

『巨人の星』(一〇巻一一八頁)

このように実際のプロ野球で起こった出来事を批判している場面は、契約更新の時にも大きく表れている。

プロの世界では自分の実力がどう評価されているかは金銭によつてはつきりしめされ
ますからね

(中略)

さらに球団から高い給料をもらえばなお勝たねばならん

(中略)

柴田さん城之内さん堀内さんあたりもずらり未更改のまま年越しだ

みんな自分が巨人に必要なだと自信がある

『巨人の星』(七巻一一八頁)

王や長嶋が高い契約金で更新を迎える中、他の選手は自分の実力を評価してもらうため契約を更新しない。花形や飛雄馬もまた契約更新を球団ともめていた。

荒保宏は、『巨人の星』における架空の巨人について、文庫版最終巻のあとがきにて次のように述べている(22)。

ときあたかも管理野球をかかげた川上巨人軍の時代にあたり、日本のプロ野球も大きな転回点を示していた。その方向をひとこといえば、サラリーマン化された野球——とでもいったところだろうか。

おそらく『巨人の星』に描かれた架空の巨人軍は、そういった現実の巨人軍のサラリーマン化を補償するアンチテーゼとして、六〇年代全共闘世代に愛読されたのだろう。

(中略)

これは巨人軍を否定する巨人軍の長大な物語だったのである。

川上監督の「管理野球」やドラフト制度など、「仕事」としての存在となつてしまったプロ野球は、『巨人の星』の中で飛雄馬を孤独にする。

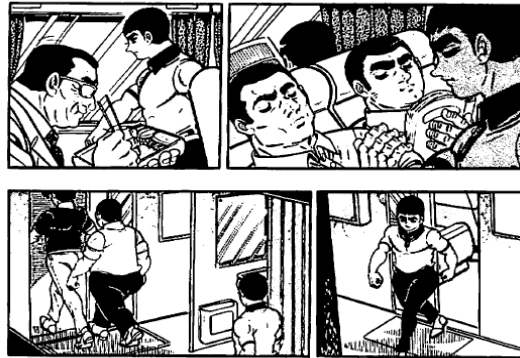
大リーグボール三号が破られたあと、川上監督が飛雄馬に声をかけようとするが、飛雄馬

は無言で立ち去ってしまう。また、オールスター戦に向かう車中でも飛雄馬が無言で川上監督や王、長嶋の横を通りすぎる(図②)。伴が巨人からいなくなつた出来事であることから、飛雄馬にとって巨人にいる人が「仕事」上の関係でしかないことが読み取れる。



図② ↑一〇巻二五五頁

↓一一巻一一三頁



巨人批判として物語上大きく表れているのは、伴の移籍による覚醒である。もともと一徹が見越していたのは伴の捕手力だけでなく打力でもあった。しかし、巨人は伴をあくまで星とのバッテリーとして、二軍でありながらも補欠としてベンチに上がらせていた。

なぜけんせんせんかというとおれは今シーズンついに一度も公式戦に出場せずじまい
せめてこれくらいは巨人軍側にかせいどかんと 来年はくびの危険性がある
星をはなれては生きていけんからのう

『巨人の星』(六巻三六六頁)

伴は、自分が巨人において飛雄馬のおまけとしか考えられていないことに気が付いていた。そして飛雄馬もそのことに気が付く。

このままではきみの青春はない……
おれひとりの栄光のかけで伴が 永久に縁の下の力持ちでおわるのはしのびないのだ!
『巨人の星』(九巻二二六頁)

飛雄馬はこのままでは彼に「青春」はないと感じて、伴に中日移籍を進めるのである。結果、中日で大きな活躍を見せるようになった物語展開からは、当時実在した巨人に対する批判を読み取ることが可能であろう。

* 任侠

六〇年代後半から、少年少女向け週刊誌がテレビと並んで子どもたちの日常生活に大きな影響を与えており、この六六年の一月には『週刊少年マガジン』は一〇〇万部を突破する。その時の『週刊少年マガジン』の看板タイトルが『巨人の星』であった。野球ものを踏まえながらも主人公の青春を描き、青春マンガのような展開を見せていく姿に魅せられ、読者は漫画とともに現実を生きて行こうとした。それは、連載時に「星一徹の人生相談コーナー」が『週刊少年マガジン』内に掲載されていたことや、また梶原一騎が原作を担当した「あしたのジョー」で主人公のライバルであった力石徹が亡くなった時、実際に「力石徹追悼集会」が開かれ、棺桶や祭壇、遺影などが置かれた本格的な葬式がおこなわれたことなどから分かる。

六〇年代後半というのは団塊世代の子どもたちが大学紛争のなさかにあつた年でもある。学生たちが革命家ゲハラに憧れる一方で、任侠映画に熱い思いを託し、「寅さん」で義理と人情の世界を味わい、『巨人の星』を中心とした劇画漫画が必須であった。全共闘の人たちはその当時、実力闘争で勝利を収めるかどうかは確実になく敗北も予想していた。だが、「抑圧された者がやむにやまらず決起したときには美しく負けよう」という、当時流行していた任侠の封建的世界と先鋭的な革命理論を結合させていたという。

『巨人の星』では終盤の主要人物として京子という女性が登場する。彼女は、「あねご」もしくは「お京さん」と呼ばれ、竜巻グループというやくざの一員であった。飛雄馬が大リーグボール二号を破られ自暴自棄になり、周りの目から逃げるために入った映画館で起こ

たトラブルの中で飛雄馬と京子は出会う。

京子は、最終話において飛雄馬と同じ映画館でトラブルに巻き込まれた左門と結婚する。しかし、京子は出会った当時惚れたのは飛雄馬の男気であり、やくざではやってはいけない「金をもらわずに助ける」という行為を飛雄馬たちにしてしまう。そのことがやくざの親方にならば、悪い、「エンコヅメ」をさせられそうになる京子に対し、京子を慕う手下の者が飛雄馬を訪れる。やくざの世界を全く知らない飛雄馬だが、京子が飛雄馬を頼らずに「エンコヅメ」をしようとしていることを知る。

愛が…やくざ会社のしきたりであつても金のことなど一言もいえなくさせ…

愛が…とうぜん予想されるやくざ会社の残忍な制裁にあまんじるかくをさせ…

愛が…さつきその地獄の事務所からおれのマンションに電話してきても結局何も言えなくさせた…

ズベ公の気まぐれと軽くあしらっていたがこれほどの事実だったか！

『巨人の星』(一一巻一六頁)

飛雄馬はここで初めて「任侠」という世界を知る。『巨人の星』はその当時の時代を反映する反面、飛雄馬が時代の流れについていけないことを表している。読者はマンガとともに時代を生きて行こうとしたのだが、飛雄馬は現実を生きていないのである。

* 変容する「根性」「青春」

六〇年代からゼロ年代にかけて「スポ根もの」というジャンルの定義はあいまいになった。二〇一三年三月の朝日新聞には難波功士が「忍耐して頑張れば明るい未来がある」という社会像も既に崩れた⁽²³⁾といひ、『巨人の星』などの一九七〇年代に代表される典型的な「スポ根もの」は一掃されたという。しかし、「根性もの」というのは既に七〇年代から崩れていた。

六〇年代に流行した「根性もの」は、「魔球」と同様にギャグ化していく。それは日本の安定期による、根性・忍耐の希薄化や古臭さが発生してしまったからである。一九七〇年から『週刊少年ジャンプ』で連載された「ど根性ガエル」は、どんなに踏みつぶされても「根

性」で耐え抜いてきたピョン吉と呼ばれるカエルが主人王のひろしのシャツに張り付いたことでひろしを振り回していくギャグ漫画である。また一九七四年から放送された特撮番組「がんばれ!!ロボコン」も常に失敗ばかりのロボット・ロボコンが上級のロボットになるために努力するコメディ作品である。このように、時代の流れを反映した『巨人の星』という作品と「スポ根もの」というジャンルが、「笑い」の対象として読み取られるようになってしまったのも時代の変化によるものなのである。

『巨人の星』の時代に描かれた「スポ根もの」のほとんどは、ライバルとの勝敗に関する海外を指して物語が終わる物語が多い。「アタックNO.1」では、主人公は敵に敗れるものの、次の世界大会を目指して終わる。「エースをねらえ!」でも、最大のライバルに勝利し、ウインブルドンを目指し海外へ行こうとする空港のシーンで亡くなったかつてのコーチの「エースをねらえ!」という声を聞いて物語が終わっている。これは、主人公がライバルに勝利をしてもまだ「エース」になっていないことや「NO.1」になっていないことを意味する。

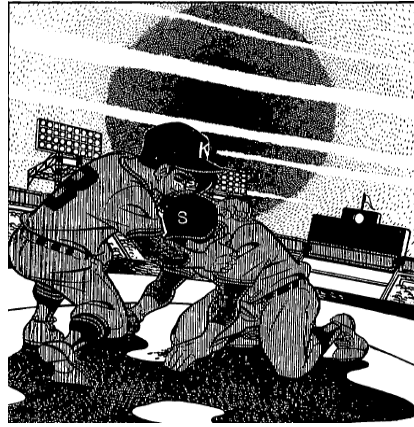
このように、勝敗関係なく「スポ根もの」の主人公たちは「NO.1」や「エース」という一番になるために「次」の目標に向かう。その拠点を海外にする理由は、戦後における「追いつけ追い越せ」の精神の名残である。そして、現代の日本のスポーツにも「スポ根もの」と同様に世界を目指すという目標はあり続けていると言える。

炎に燃え上がる目は、ライバルとの真剣勝負の時や努力している場面に多くみられる。また、たびたび登場する重要な風景描写に夕日のシーンが多い。「血染めの甲子園決勝」にて花形と飛雄馬が抱き合うシーン、そして最後の一徹と飛雄馬のシーン(図③)が印象的である。そして、修行、特訓する際は誰しもが汗とともに血を流す。このように『巨人の星』には赤を連想させる描写が多いことが読み取れる。

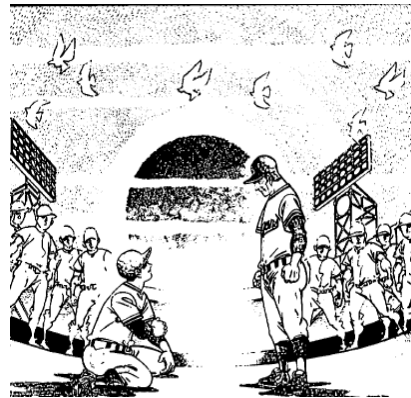
『巨人の星』のテーマは「青春」である。そしてそれは今もなおスポーツマンガにおける大きなテーマとなって存在している。そもそも「青春」とは、人生における若く未熟で、しかしながら元気にあふれた時代のことをさす。「未熟なもの」として古来より「青臭い」「青二才」などの言葉が存在している。「赤い熟」「青い未熟」という考えによるものではないか

という説も存在する。これを踏まえた上で夕日を重要視している『巨人の星』の青春とは何なのだろうか。

「夕日」と「青春」から連想するものは、夕日に向かって「ばかやろー」と叫ぶ、もしくは夕日に向かって走るといふのを想像するのではないだろうか。この元ネタは不明とされているが、スポーツと青春を結び付けた青春シリーズと言われるテレビドラマシリーズが存在する。この青春シリーズでも同様に夕日が使われており、タイトルに「炎」とつくものもあり「赤」と青春が結びついていると言える。



図③↑三巻一一四頁
↓一一巻三七五頁



この様に、青春シリーズだけでなく従来の「野球もの」のマンガでは、表紙に夕日をバックにする表紙が見受けられ、練習や特訓を連想させるものが多かった。しかし、現在では青空をバックにするものも多く、「おおきく振りかぶって」は表紙が青空で統一されている。勝利するために「熱」を持った根性で耐え抜いてきた練習の日々が報われる、もしくは報われなかった瞬間を「青春」と呼び、そのシーンに培ってきた練習を想像させる「夕日」を結び付けているのではないだろうか。

しかし、『巨人の星』における青春には「楽しい」という感情が存在しないのがわかる。

今シーズン末ライバル花形をたんだで球場から送り出した星こんどはみずから…

どちらも勝って傷だらけ

楽しむプロ野球という立場から見てもここまでくるとどんなものでしょう

その証拠に こおりついたように声なきスタンド

『巨人の星』(七巻九六頁)

アナウンサーのセリフにもあるように、「死闘」とまで言われる試合展開は観客までを凍りつかせる。

『巨人の星』の野球に「楽しさ」がないのは、野球があくまでも「仕事」だからである。そのため、勝つために根性で努力するという行為が「青春」とつながってしまう。今は、たとえプロ野球の作品であっても「楽しさ」が含まれているものを「青春もの」と呼ぶのではないだろうか。そのため「未熟」な青の背景が今「青春」とつながっている。このように「スポ根もの」の変容は、「青春」の捉え方自体が変容していった側面があるのである。

第四章 精神分析

*父越えの物語

現代のマンガにおいてスポーツに限らず様々なジャンルに派生している「根性もの」の基礎として『巨人の星』が存在するが、『巨人の星』の最大の魅力は「父と子の物語」であるといえる。

「ライトノベル作法研究所」(24)というサイトでは、「父と子の対立」について詳しくまとめている。子どもが父という壁を乗り越えて一人前として認められる話というのは、ギリシヤ神話や「マッシュヨイズム」と呼ばれる男の世界に多く見られる。父と子の物語には、「刃牙」(25)や「スターウォーズ」(26)のように対決するタイプと「ドラゴンボール」(27)のように協力して悪に立ち向かうタイプに分かれる。いずれのタイプであっても、父は息子を育て、やがて息子が父を超えることで物語は完結する。『巨人の星』の星親子は、「協力」と「対決」のどちらのタイプとも言える。

松村良は、『巨人の星』の「父と子」の親子関係について述べている(28)。飛雄馬に限らず、花形や伴の家族も母親についてはあまり描かれず「父と子」中心で登場し、これは梶原一騎が、高度経済成長期における日本の家族のあり方(マイホームパパ)を批判しようと

しているからであるという。しかし、『巨人の星』は、最も印象的な星親子の関係でさえあまり良い関係で描かれていない。

一徹にとつて戦争に行くまでの「正道」を歩んでいた頃が〈光〉としての自分であり、摩送球を編み出して巨人軍を去り、長屋暮らしの日雇い労働者として子どもたちを養っている今が〈闇〉としての自分なのだ。

(中略)

飛雄馬が長島に摩送球を投げつけたその日を境に、「壊す父」から「造る父」へと転換する。息子の飛雄馬を超一流の投手の「創る」ことへの情熱は、かつての〈光〉としての自分を取り戻そうとするあがきであり、大リーグボール養成ギブスは、そのような「創る父」としての一徹の象徴だった。

『巨人の星』は、飛雄馬が一徹(父)の夢を追いかける物語から、敵側にまわった一徹を倒そうとする父越えの物語へと移行する。結果、一徹は飛雄馬を「壊す父」へと戻ってしまふ。しかし、この「壊す」行為の裏には飛雄馬を「巨人の星」として造り上ようとした一徹の行動でもある。

山田夏樹は、大リーグボール三号は「孤独」となった飛雄馬が編み出した一徹から「完全に孤立」した魔球であり、子の魔球により父と子の対立構造は崩されていったという(29)。

い いま はじめて 子は父に勝ちつつあるっ

底知れぬ大リーグボール三号で!

『巨人の星』(一一巻二八〇頁)

伴はこの「大リーグボール三号」を真に受けた瞬間父が子を乗り越える、つまり完全に独立していくことを悟る。

そして、最後の試合において、左腕を完全に故障した飛雄馬に向かい一徹はこう言う。

いまおまえはパーフェクトにわしに勝ちこの父をのりこえた……
わしら親子の勝負はおわった!!

『巨人の星』(一一巻三四頁)

松村は、最後の試合の父と子のシーンについてこう述べる(30)。

父と子は、「栄光」と「破滅」、〈光〉と〈闇〉とが同時に存在する空間に立っている。それはソフオクレス『オイディプス王』のごとく、自己の存在自体が「破壊」をはらむものであっても、それを正面から受け止めることだけが人間の「栄光」であるというギリシヤ悲劇的な空間であり、数々の愛憎を乗り越えてきた者たちだけが到達できる浄化の場なのである。

最終試合ではじめて一徹は子が父を乗り越えたことと認める。このように「父と子の対立」は父越えを認められた瞬間に完結するのである。結果、飛雄馬は父親のもとから姿を消してしまふ。『巨人の星』はマイホームパパだけでなく、一徹のような父親像も批判しているといえる。

オイディプス王が犯した「父親殺し」をフロイトという精神分析医は「エディプスコンプレックス」と呼んだ。子どもは母親を手に入れるために父親のような男になろうとする。子どもはじきに父親を排除したいと思うが、絶対的な父の怖さに気付き、母親を手に入れられないことに葛藤する。子どもはこの葛藤から逃れるために最終的に両親を捨てるのであるが、子どもは父親と対立するために「同一化」してきた側面と、父親から「やってはいけない」と言われた禁止事例を形成するのである。

飛雄馬は、一徹の目指した「巨人の星」になろうと努力する。しかし、最終的には父と対立し「やってはいけない」ことをし身体を「破壊」していく。この物語展開はオイディプス王と近いと言える。しかし、「エディプスコンプレックス」は子どもが母親を得るために行動するのだが、『巨人の星』では母親がまったく描かれない。

飛雄馬は、「エディプスコンプレックス」と「父親コンプレックス」が混ざった状態であ

ると言える。「父親コンプレックス」とは、父親に対する敵対心や「父親を乗り越えたい」という気持ち、さらには「父親に愛されたい、認められたい」という気持ちが複雑に入り組んで、時として強い感情的な反応が生じることを言う。「父親コンプレックス」となることで、会社の上司に妙な反抗的態度をとることや、その逆に上司に認められようと極端にはりきるのが例である。

飛雄馬にとって会社は「巨人」という球団で、その一番偉い上司として川上監督がいる。飛雄馬は、幼少期巨人に反抗的な態度をとっている。その理由は、摩送球を生み出した一徹に対する巨人軍追放と、そのことで墮落していく父の姿を飛雄馬は見えていられなかったからである。それだけでなく、飛雄馬は野球しかやらせてもらえず自分の言うことを聞いてもらえなかった父の自分に対する愛情が欲しかったため反抗的な行動をとっていた。

「巨人の星」という一徹が成し得なかった夢を目指す飛雄馬にとって、「巨人の星」となることではじめて「父親に愛される」と思ったのではないだろうか。

*鏡像段階

フランスの精神医学者ラカンが提唱した鏡像段階とは、まだ身体のイメージがバラバラな赤ん坊が、鏡に映った自分の姿を見ることで自分の身体を認識し自己を形成していくことで、生後六カ月から一八カ月の間に赤ん坊はこの過程を経る。

石田浩之は「鏡像段階」について以下のように述べる(31)。

人間は、鏡像という救いのイメージのおかげで、バラバラな身体像という根源的苦悩から抜け出せるがゆえに、この像に惚れこむ。しかし、この像、ロボット、分身を破壊し、殺し、その不安定から逃れようとする傾向が生じてくる。しかし、ロボット、分身、鏡像をなくせば、自分もなくなり、最初の根源的苦悩に逆戻りしてしまう。そのため、これを壊すことはできない。そこでこの葛藤は永久に続くことになる。

飛雄馬にとってこの鏡像はオズマである。大リーグの名門と呼ばれるほどの実力を持つセントルイス・カーディナルス戦で登場したオズマは、カーディナルス球団の計画のため孤児院から引き取られ、黒人ゆえに恵まれたその運動機能を野球に活かすため、一五年かけて野球の

ためだけに教育されてきた「野球人間」であった。これは幼いころから一徹に野球を教え込まれた飛雄馬と合致する。何よりはじめからオズマは飛雄馬と自分を同じ野球でしか生きていけない「野球ロボット」だとして見ている。オズマが飛雄馬に向かい「恋人はいるか」「本は読むか」「野球以外の友人はいるか」などと質問をする場面がある。飛雄馬という同じ境遇の「他者」から自分の姿を見ており、オズマはその自分と同一視した「他者」に負けたことに嫉妬し、復讐心に燃えていた。このオズマと飛雄馬の「鏡像」は質問をする場面のコマ割りが対になっていることから「鏡」として想像できる(図④)。

飛雄馬もまた、オズマの「俺とお前は野球ロボットだ」という発言を受け、同じ境遇の「他者」オズマから自分を見てしまう。この「野球ロボット」という言葉は、野球に向いてない身体ながらも野球を続ける飛雄馬にとっては「救い」でもあり、「呪縛」であるとも言える。しかし、飛雄馬ははじめその言葉を否定し、自分は人間になれる、とさまざまな遊びに興じるが、そこで感じるのはむなしさとオズマの「野球ロボット」というセリフと顔であった。



↑図④七巻一三〇頁

しかし、オズマはこの鏡像段階をすぐに乗り越える。それは一徹という「他者」の参入によるものが大きい。「野球の奴隷になれ」という一徹の教えは、野球は自分を動かすだけのスイッチでしかなかったオズマにとって理解が出来ないものであった。野球という「仕事」

に頭を下げ、すべての情熱を捧ぐという「日本的」な野球と、オズマを奴隷として一徹が縛った鎖だと思われていたものが、飛雄馬を倒すために作られた「大リーグボール打倒ギプス」であると知り、オズマは動揺する。この動揺は、同一視している飛雄馬という「鏡」を割るために用意された道具であることに気づいたからではないだろうか。その後の練習では「イエスサー」と英語で最高に良い返事を意味する言葉を一徹に言う程になった。

オズマはその後、大リーグボール一号を打ち破ることに成功するが、のちの二号を破ることができないまま、カージナルス球団の移行でアメリカへ帰国する。

見送りアリガトウ ソシテキミトノ死闘ヲツウジテ オレハ野球ロボットカラドウヤ
ラ人間にナレタコトモナ！

『巨人の星』（九巻二〇一頁）

この発言から、オズマが既に「鏡像段階」から抜け出せたことが分かる。

もう野球人形じゃない…つもりだ！

『巨人の星』（九巻二〇一頁）

しかし、その後の飛雄馬のセリフから、飛雄馬は「野球ロボット」から抜け出せていないことが読み取れる。

オズマに参入した「他者」は一徹であったが、飛雄馬には美奈という「他者」が参入した。「野球ロボット」ではなく人間らしく生きていくことに苦悩していた飛雄馬に美奈という「他者」は、他者には他者の、自分には自分の青春があることを飛雄馬に気付かせる。美奈と出会うことで飛雄馬の「巨人の星を目指す」という自我を取り戻すことが出来たと見える。

しかし、美奈が亡くなったことで飛雄馬は参入した「他者」の存在を無くしたことになる。野球に対してのやる気をなくしてしまった飛雄馬に対し、父やライバルからの呼びかけで彼は再び野球に向き合う。それは、すなわち「他者」の参入がなかった元の状態に戻ることに等しく、飛雄馬は結局オズマと「鏡像」であった「野球ロボット」として再起したにすぎないのである。これが、オズマにたいしてはつきりと「野球人形ではない」と言えなかった

理由である。「鏡像段階」から抜き出しきれなかった飛雄馬は、その結果次々と悲劇が訪れることになる。

* コンプレックス

飛雄馬は身体が小さく球質も軽いという野球選手としては「致命的な欠点」を持つ。そういった野球に向いていない身体を持ちながらもひたすらに努力して困難に立ち向かっていく姿を一般的には「スポ根」と呼ぶのだろうが、一方でその「致命的な欠点」を無理やりでも打ち消そうとする姿は「劣等感コンプレックス」であるとも言える。

コンプレックスとは、単なる「自分は劣っている」という感覚ではない。劣等意識を打ち消そうとする複雑な感情や行動を「コンプレックス」、または「劣等感コンプレックス」と呼ぶ。

そもそもこの「致命的な欠点」は「体力の点でどうしても大リーガーにおよばない日本人の投球力を強化するための理想的な方法」として編み出された「大リーグボール養成ギプス」にしめつけられながらも「巨人の星」を目指した結果生み出されたものである。飛雄馬はそのコンプレックスに気づいたとき初めはそのことに苦悩するも、伴の励ましや、金田の助言によって乗り越えよう努力する。しかし、その助言を受けた後に、飛雄馬先発で行われた紅白試合で敵側から「致命的な欠点」を指摘され動揺する。

おれは弱気すぎたのかも？案ずるよりも生むがやすしだ！

おれほどのスピードがあれば 球質が軽かろうがなんだろうがバットにあてさせなければそれまで！

『巨人の星』（五巻九七頁）

しかし、飛雄馬自身はこの速球だけでも十分活躍することができると、「致命的な欠点」を打ち消そうとするのだ。

花形や左門もおれの速球はまだまだ通用するんでは？

おれの大リーグボールは新しい変化球などではなくやはり速球だったぜ

目にも止まらぬ快速球だった！

『巨人の星』（五巻一〇六頁）

だが、結果的には、「致命的な欠点」は現実のものとなり、次の試合で、飛雄馬はあっさりホームランを打たれてしまう。

このように、コンプレックスは、飛雄馬にとって、努力の起爆剤のようなものでもあるのだが、一方で決して解決されずに残り続けるものである。これは、飛雄馬がこのコンプレックスと対話をせず、負の感情を周りに転移させない性格から生じる問題である。飛雄馬は、他人の感情を「気の毒なほどに感じやすい」、または「他人のかなしみをそっくり自分のかなしみ」として感じてしまう性格である。そして、自分のかなしみを絶対に公には口に出さない。これは、自分の負の感情で他人を悲しませたくないという感じやすい性格から生じるものであった。自分の「致命的な欠点」を知った時や、速球が打ち破られた時、美奈が亡くなった時も伴や一徹以外には口には出さなかった。

しかし、当初は支えてくれる家族や友がいたため、その感情が崩壊することはなかった。だが、伴が中日に移籍するために荷物を取りに来た日、飛雄馬に真の孤独が来る。荷造りを手伝う飛雄馬と伴はおよそ六頁分一切会話をしなかった。そしてお互い去った後に静かに涙を流す。

そして、辛うじて支えられていた飛雄馬の精神は花形に大リーグボール二号を打ち破られた瞬間に決定的に崩壊した。

なぜか さほど悲しくもない

ただ うつろ……

ただ むなし……

ひきのばしすぎたゴムのようにならりと弾力を失っちまってる

（中略）

ほんとうの野球とは……

でっかいやつが力のかぎり投げ込むボールを でっかいやつが思いっきりぶったた

く！

どでかいグラウンドせましとでっかい男たちが地ひびきたててかけめぐる

（中略）

おれは野球をバッテリー間だけの小手先だましの手品にだらくさせた！
手品師なんてたねが 割れちまえば最後 もうおよびじゃない

『巨人の星』（一〇巻二五一頁）

黒い背景のもと自分の「致命的な欠点」を打ち消しながら行ってきた野球を否定し、自分のことを笑い、自分やつてきた野球はなにをもたらししてきたのかと自分に問いかけるのである。そしてその感情の矛先は父親に向かう。

い いま おれは生まれてはじめて……

とうちゃんを星一徹という男をにくみはじめているっ

おれをこんなにしちまった男を いっさいのきれいごと抜き生々しい憎悪をこめて！

『巨人の星』（一〇巻二六〇頁）

これは自分のコンプレックスと対話できなかった結果生じた感情である。そして父親に矛先を向ける飛雄馬は、幼少期「父親のせいだ」まともに遊ばせてもらえず、学校でも「養成ギプス」のせいで恥をかかされた時の感情に戻ってしまった。戻ってしまうということは、「成長しない」ことを指す。

飛雄馬は「野球ロボット」である。「野球ロボット」というのは「成長しない身体」を表すのであり、これは先行論でも述べたように「大人になれない子ども」としてのアトムの問題と同様である（32）。

父親の手から離れ「独立」したように思えるが、「大リーグボール」は成長することが出来ない身体から創り出した「兵器」である。一度その弱点が見抜かれてしまえば、「ホームラン配給王」というバッテリーセンターの機械と同様の存在となり、次の「大リーグボール」が創り出されるまで飛雄馬は沈黙を強いられる。

一度はその「ロボット」から抜け出したように見えて、最後まで成長することの出来ない身体は、「コンプレックス」から逃れられなかったのと同時に、「決して完成することのない」永遠の少年といえる。

ラストの試合において飛雄馬にとつての目標であった「巨人の星」になれたかというのは曖昧であり、到達したとは言い難い。物語上、決して完成という決定的な終わりをせず去っていく飛雄馬は最後まで少年＝子どもであり、大人にはなれなかったのである。

おわりに

原作において『巨人の星』では一徹はちやぶ台をひっくり返さない(返したのはちやぶ台ではない台で一回のみ)。また、姉の明子は木の影から泣くのではなく堂々と町中でも飛雄馬を思い泣く。バラエティ番組などで取り上げられた飛雄馬が独りでクリスマスを過ごすシーンも、アニメ版オリジナルのものであった。

私は今回「スポ根もの」を調べてみて初めて「アタックNO.1」や「エースをねらえ！」の最終回を知った。私のように、「魔球」や「根性」のシーンが印象に残り、最後の展開を覚えていない人が多いのではないだろうか。

主人公たちが勝利や目標達成のためにスポーツに打ち込む姿は今も昔も変わらない。飛雄馬の血と汗と努力にみちあふれた姿は、ゼロ年代のスポーツマンガでも垣間見ることができ。変わっていったのは、主人公を取り巻く環境と、時代なのである。

今後も「スポ根もの」は続いていくだろう。その中でまた飛雄馬のような少年に会える日が来るのかもしれない。

(註)

- (1) 村上知彦 「スポ根マンガ」 『大衆文化事典』 一九八九(平成元)年一月 弘文堂 416頁
- (2) 斎藤孝 「巨人の星」 『スポーツマンガの身体』 二〇〇三(平成一五)年六月 二〇日 文藝春秋 15頁

- (3) 井上俊、菊幸一 「スポーツマンガ」 『よくわかるスポーツ文化論』 二〇二二(平成二四)年一月 ミネルヴァ書房 130頁
- (4) 西村安弘 「武道小説からスポ根へ―宮本武蔵の求道者イメージをめぐって」 『東京工芸大学芸術学部紀要』 15巻 二〇〇九(平成二二)年三月三十一日 95頁
- (5) (3)に同じ
- (6) 堀籠美佳 「スポーツ少女にみるジェンダー―一九七〇年代と二〇〇〇年代のマンガ比較による」 『東北学院大学教養学部論集』 165号 二〇一三(平成二五)年八月 139頁
- (7) 唐沢俊一 「唐沢流マンガ用語辞典 アナーキーな魅力の原点を探る」 『コミック学のみかた。』 一九九七(平成九)年 朝日新聞社 157頁
- (8) 畑山敦子 「オトコン・上」 ソロ支えた親友の音 千葉・千城台高校吹奏楽」 <http://www.asahi.com/edu/suisogaku/contest/TKY201009250240.html> 二〇一四年一月二七日閲覧
- (9) 倉持佳代子 「みんなのマンガ学」 ちはやふる スポ根かるた部、熱血も恋愛も」 <http://book.asahi.com/reviews/column/2011071701175.html> 二〇一五年一月一九日閲覧
- (10) 日閲覧
「第二のスラダグ、黒バス超え?腐女子だけじゃないスポ根漫画『ハイキュー!!』が大人気」 <http://news.aol.jp/2014/06/04/haikyuu/> 二〇一五年一月一九日閲覧
- (11) 岩間夏樹 「イマドキの若者考(15・最終回)スポーツマンガの現在」 『労働基準広報』 二〇一〇(平成二二)年一月二二日 労働調査会 38頁
- (12) 紙屋高雪 「マンガばかり読んでちゃいけません!」(4) 「スポ根」マンガは死んだのか?」 『人間と教育』 二〇一三(平成二五)年 民主教育研究所 125頁
- (13) (12)に同じ
- (14) (12)に同じ
- (15) 佐原龍誌 「マンガにみる日本のスポーツ文化―『巨人の星』を手がかりにして―」 『多摩美術大学研究紀要』 19巻 二〇〇四(平成一六)年 121頁

(16) 鷺津浩子 「ベースボールと野球その一―日本野球物語としての『巨人の星』」
『成城文藝』120巻 一九八七(昭和六二)年七月 404頁

参考資料

(17) (11) に同じ

(18) 山田夏樹 「ステレオタイプと『野球ロボット』―『巨人の星』における『日本人』表象」 『昭和文学研究』60巻 二〇一〇(平成二二)年三月 54頁

・近藤達士 『週刊日録二〇世紀』一九六一―一九六六年まで 一九九八(平成一〇)年五月六日～六月三日

(19) (16) に同じ

・竹内惇 『朝日クロニクル週刊二〇世紀』一九六一―七〇年まで 一九九九(平成一一)年六月六日～八月一日

(20) 大塚英志、ササキバラゴウ 「梶原一騎」 『教養としての(ま)んが・アニメ』
二〇〇一(平成一三)年五月 講談社 38頁

・福島哲夫 『図解雑学 ユング心理学』 二〇〇九(平成二二)年六月 ナツメ出版

(21) (12) に同じ

(22) 荒保宏 「ハングリーという名の反逆」 文庫版『巨人の星』一一巻 一九九五(平成五)年八月一〇日 389頁

(23) 「ど根性なき『スポ根マンガ』」 二〇一三(平成二五)年三月三日付け朝日新聞(なお、引用は(12)に同じ)

(24) 「父と子の対立」 ライトノベル作法研究所

(<http://www.raionoveru.jp/photo/simwa/03.html>) 二〇一五年一月一九日閲覧

(25) 板垣恵介作(「週刊少年チャンピオン」連載、全42巻)。作中の主人公刃牙と父範馬勇次郎の対決のこと。

(26) 映画『スターウォーズ』における主人公ルーク・スカイウォーカーとその父ダース・ベイダーの対決のこと。

(27) 鳥山明作(「週刊少年ジャンプ」連載、全42巻)。主人公孫悟空と息子の悟飯のこと。

(28) 松村良 「星一徹・飛雄馬の〈光〉と〈闇〉」 『親と子の愛と憎しみと』二〇〇八(平成二〇)年一月三〇日 勉誠出版 264頁

(29) (18) に同じ

(30) (28) に同じ

(31) 石田浩之 『負のラカン―精神分析と能記の存在論―』 一九九二(平成四)年二月二十五日 誠信書房 19頁

(32) (20) に同じ